及川大工を追って

―間瀬高齢者グループが検証した西入寺（潟東）―

第十回

昭和五十年代の初頭までに、わたしたちは多くのかや葺きの文化遺産を失ったのでないでしょうか。

日本画の鬼才横山操、間瀬の漁村のひなびた民家を描いた「間瀬夕照」の家々（吉田の医師の私生児、別荘が間瀬にあり、夏はここで過ごした）

そして大字横曽根の菅井甘露が主宰する寺小屋「聚石堂」などがそうです。

これらの建物は、どこにでも点在した農漁家の民家でした。

間瀬大工は常に大規模な寺社建築に携わっていたとは限りません。会津地方に諺が残っています。

――ハマ大工が仕事しておるときは、家を留守にしても安心だ――

これは間瀬大工の実直な人柄による信頼感と民家の仕事をしたことが知れます。

文久三年、甘露は晩婚の住まいを建てることになりました。

基礎石を近郷の人々が持ちよったことから「聚石堂」と名付けられました。

棟梁は田中善蔵。

普通の民家でしたが、屋根裏を利用した教場は、子供たちがどんなに騒いでも揺れることはなかったそうです。

甘露は放浪して世情の流れをつかんでいました。やがて新しい時代が訪れることを教えたと言われる。

三十才の善蔵棟梁もこの声に耳を傾け、六年後に未開の地、函館に渡りました。そして洋風建築函館裁判所を完成させたのです。（先号掲載）佐渡の島がくっきりと浮かぶ日、高台に立つ善蔵家を訪れ驚きの発見をしました。

座敷のふすま障子四枚に甘露の晩年の自筆漢詩が表具してありました。

これらの漢詩書を調査していきますと、潟東村三方の「西入寺」が田中善蔵家によって建立されたことが分かってきました。

早速、間瀬の高齢者グループの寿学級と検証してみました。

西入寺は真宗大谷派、親鸞の弟子が創建した一宇に始まり、〝寛文年代に当地に移転〟と伝承されています。

鐘楼門をくぐり、本堂に合掌するとき、間瀬大工の堂宮技法の重厚な荘厳さの鼓動は伝わってきません。建設当初の外観が大きく変化しているのです。

その要因はかや葺き、瓦、銅板葺きと屋根形態が変化しているからです。

葺き替えのとき、それぞれ屋根傾斜、軒出しなどが改築されたからでしょう。

本堂で正座合掌するときも、間瀬大工の独創的技法はハダで感じる雰囲気はありません。

しかし、よく検証すると随所に特性が目に入ってきます。

西入寺を検証した――間瀬寿学級――
（平成10年10月8日）

棟札が発見されていませんが、「造替」「修復」の文字が墨書きされているのではないでしょうか。

推察の域を脱っしませんが、既存の遺構はなるべく残し、かつ利用できる材料は極力利用する。

完成像は真宗派に相応しい荘厳さを求められ、善蔵は造替えたものではないでしょうか。

このような推考で検証していきますと合致することが多いです。

向拝柱は本堂と海老虹梁で連結されていて、虹梁面に深く彫られた渦形状、その形状は楕円形で若葉の彫りも渦から枝分かれしています。

この彫られた絵様と深さから天保年代と推定できそうです。

そして、虹梁の上天井の垂木に附いた龍手狭（てばさみ）彫刻の大胆さ、力強さは間瀬大工彫刻そのものです。不可解なことに、虹梁の下面にホゾ跡が刻まれています。

これは、虹梁を支える支輪をつけたホゾでしょう。

両方とも喪失してありません。仮に支輪を付けたとしても、全く虹梁を支える力はなく、単なる装飾にすぎません。

これらから、この虹梁は後からハメこまれたことが分かってきます。

間瀬大工は円柱を造るに正方形の用材を角割りしながら仕立てる技法です。

床より上は円柱でも、縁の下の部分は、八～十六角の荒角割の作業工程が見られます。

縁の下を検証すると、内陣など主柱には角割が確認できました。

これらから、主要な柱は入れ替えられ、建物全体も高くされ、寺院としての威容が整えられたと思われます。

改修を完成したときは、厚いかや葺き、深い軒出しなどのバランス感で、全体外観は真宗寺院の華やかさと重厚に満ちた素晴らしさは、――さすが浜大工――の称賛の声は大きかったでしょう。

本堂に入ってみましょう。

失礼な表現ですが、全体的に木割が乏しいですね。

構造的に力の加わる主要柱を建替え、古い構造物を利用したことに起因しているからでしょう。

しかし、本堂の要、内陣は宗教的威容に満ち、造替えの雰囲気は全く感じません。

内外陣の欄間は一般的な彫刻師の作品のようですが、その上の縁回りに彫られた彫刻は、まぎれもなく力強さが漂う間瀬大工の作品です。

この寺の建立は、虹梁文様から天保時代とすれば、「聚石堂」を造り、北海道に渡り「函館裁判所庁舎」を造った、善蔵の妻の父、養父善蔵の年代になるでしょう。

祖父善蔵（信州　健命寺の脇棟梁）養父善蔵（西入寺）婿善蔵（函館裁判所、村長）と田中善蔵棟梁三代に亘る墨付けの跡が分かってきました。

（岩室村生涯学習推進本部）

■広報いわむろ　第四四二号　平成十一年二月一日発行（毎月一回一日発行）■発行　岩室村役場■編集　総務課■新潟県西蒲原郡岩室村大字西中八六〇（〒九五三―〇一九二）■☎〇二五六―八二―四一一一（代）■印刷　北洋印刷㈱